

2007年夏 ソウル ―光と闇の記憶―
文京洙著『韓国現代史』に見る“周縁”の生と死の戦い

大 空 博

はじめに

太平洋戦争が日本の敗戦で終結した1945年8月。国民学校の1年生だった私は、直前の2月、母と姉に手を引かれ、兄と弟と、もうひとりの乳飲み子だった弟とともに上海から郷里の大牟田（福岡県）に引き揚げた。紡績会社勤務の父を中国大陸に残しての帰国だった。私たち引揚者を乗せた特別列車は、長い時間をかけ南京経由で朝鮮半島にたどり着いた。そこにいたる記憶はさだかでないが、列車がソウルで長時間停車した日のことは覚えている。長旅ではじめて下車を許された私たちは、つかの間の遠足気分ひたって、ソウル駅に近い小高い丘に登った。そこで食べた焼きイモ・・・ほおばると甘さと香りが口いっぱいに広がり、うれしくて思わず涙した。あの幸福感を私は忘れはしないだろう。

2007年8月、あの日以来はじめてソウルの土を踏んだ。私にソウルへの旅を思い立たせてくれたのは、立命館大学国際関係学部の同僚・文京洙（ムン・ギョンス）の著作『韓国現代史』（岩波新書 初版05年12月刊）であった。両親が済州島出身の文京洙は、戦後の1950年東京生まれ、大学も東京の戦後派である。彼には他に学術書『済州島現代史—公共圏の死滅と再生』がある。だが、私にはコンパクトな岩波新書版『韓国現代史』の方が手にしやすかった。

日本は、平和憲法のもとにあって、韓国社会の戦後の歩みとはきわめて対照的な道を歩んできた。W杯サッカーの共催（2002年）や韓国ドラマが空前のブームとなった「韓流」を経て、韓国は日本人にとってかつてない身近な国となった。しかし、韓国のスターたちの微笑みの背後に、人民がまさに生き死にを賭けて築いてきた現代史の営みがあることに思いめぐらせる日本人は少ない。本書は、そういう日本の、一人でも多くの人びとに、隣国が歩んだ苦難の道のりを伝えたいとの思いから書かれたものである。

文京洙は、著作の「はじめに」でこのように執筆動機を記している。もうひとつの要素に、盧武鉉（ノ・ムヒョン2003年～07年）政権下に盛んになった歴史の見直しブーム、言い換えれば時代の変化がある。そこで明らかになった“新事実”をもとに、韓国現代史を再構築しようとする試みである。盧武鉉政権は南北に分断された朝鮮半島にあって、韓国の政治・経済・社会の骨格をつくった李承晩（イ・スンマン）、朴正熙（パク・チョンヒ）、全斗煥（チョン・ドゥファン）、盧泰愚（ノ・テウ）と続く、いわば保守・独裁・軍事政権とは対極の存在であり、その後、92年12月以降の金泳三（キム・ヨンサム）、金大中（キム・デジュン）大統領から盧武鉉に続く民主化路線の追い風が、旧保守政権時代への「歴史の見直し」を可能にしたといえる。そうした時代の流れのなかで、文京洙の記述は、従来の歴史が<上から>、そして<中心から>の視座を前提にしたのとは異なる、“周縁”によりどこを求めた。

私の「2007年夏 ソウル」への旅は、祖国の歴史に新たな視点を求める文京洙の熱い思いに惹かれてはじまった。

1. 目をみはる都市の変貌の陰に

関西空港を飛び立った大韓航空機は、わずか1時間余でソウル西方の港湾都市仁川（インチョン）海辺に位置する国際空港上空にさしかかった。眼下に、真っ青な海が広がり、緑におおわれたいくつもの小島の上をかすめて着陸態体勢にはいると、緑の小島に打ち寄せる白波まで鮮明に見える。そのとき脳裏をよぎったのが、57年前の朝鮮戦争での米軍・仁川上陸作戦であった。

1950年5月25日に勃発した朝鮮戦争¹⁾は、北朝鮮人民軍の進撃で一か月後に首都ソウルが陥落、さらに釜山に迫る勢いに、韓国は瀬戸際の局面に立たされた。韓国を支援する国際連合軍²⁾は、開戦直後の対応の遅れから体勢建て直しに時間がかかったが、9月15日、200隻の艦艇と兵士7万人を投入した仁川からの反撃で戦局は一変した……。

空港に接近する大韓航空の機体の窓から、右方向に仁川の市街地が一望できた。81年に広域市に指定された仁川の、高層ビルが立ち並ぶ市街地が真夏の昼下がりの強い陽光に白く輝いている。飛行場は市街地の北方、陸地と自動車道で結ばれた島に建設され、2001年に国際空港としてオープンしている。うかつにも、関西空港から韓国へ飛び立つ直前まで、その事実を知らなかった。私の記憶にあるのは、ソウル近郊の金浦空港だ。それがいまでは国内線専用に変っていた。

仁川国際空港からソウル市街地まで約40キロ。金浦空港を右手に見ながら、リムジンバスは
262（588）

片側4車線の自動車道を疾走した。〈あそこにも4車線の自動車道が走っていた…〉と車中で思う。ロンドン特派員時代³⁾の80年代後半に取材で訪れた北アイルランド。ここではカトリック教徒とプロテスタント系の衝突が絶えなかった。98年に過激派組織IRA（アイルランド共和軍）と英政府の間に包括和平合意が成立し、以後、紆余曲折を経て和平への道を歩んでいるが、4車線の自動車道は、過激派のテロ活動が本土におよんだ70年代に、英本土からの軍用機が着陸、発進できる、緊急時に滑走路としても使える4車線道路として建設されたものだ。

「仁川国際空港からソウル中心部にのびる4車線道路も、まさにそれですよ」。こんな話をソウルで聞かされた。京都でも韓国留学生の一人から同じ話を聞いた。

ソウルを南北に二分して流れる漢江（ハンガン）を渡り、リムジンバスは市中心部にある市庁舎とロッテ百貨店がそびえる明洞（ミョンドン）のビル街を抜け東大門に近い「ホテル国際」（HOTEL KUKDO）前で停車、私を降ろした。旅行代理店を通して予約したホテルである。「安ホテルで結構ですよ」。旅行代理店には事前に念をおしていたのに「ソウルはホテル代が高くて、今年の3月にオープンしたばかりの〈ホテル国際〉が値ごろだと判断しての結果」だという。眼前に21階建て・295室の新装ビルがそびえている。このホテルで1週間を過ごすことになるのだが、中心地・明洞に近い立地条件のよさからビジネスマンの利用者が多く、各部屋に超高速インターネット回線を無料で使える設備があり、日本のビジネス・ホテルとは大違いの豪華さに驚いた。

2. 韓国社会の変貌―その象徴としてのソウル

「朴正熙時代に韓国社会が経験した変化は、その規模とスピードにおいて、伝統から近代への深い断層を一気に駆け抜けるほどに圧倒的だった」と文京洙は『韓国現代史』の第2章〈軍事政権の時代と光州事件〉の一節「朴正熙とその時代」で書いている。

50年代からこの国を率い最高権力の座にあった李承晩は、1960年3月の大統領選戦でも勝利しながら、「民意を反映しない」「不正選挙」で当選したという不満から爆発した全国の高校生、大学生、労働者、一般市民の粘り強い抗議デモ攻勢の前に、4月、下野宣言して権力の座を降りた。その後の政局混迷について、61年5月、軍事クーデタが起き、軍事革命委員会が発足。革命委員会はやがて国家再建最高会議に改称、7月に最高会議議長に就任したのが朴正熙⁴⁾（当時45歳、陸軍少将）である。

朴正熙の時代は、韓国にとって転機となった。60年代後半から70年代初頭にかけて、冷戦下、緊張が高まる国際情勢のもとで「社会主義と直接対置する前線国家として、この時期の

インドシナ戦争を戦うアメリカのもっとも有力な同盟国]であった韓国に、66年～72年に実に40億ドルもの外資がつぎ込まれ、「漢江の奇跡」の引き金となったという。その“代償”とって過言ではあるまい。韓国はベトナム戦争が本格化した65年から73年に、アメリカの要請に応じ、約5万人、延べ30万人以上の実戦部隊をベトナムに派兵している。規模はオーストラリアやニュージーランドを含むSEATO（東南アジア条約機構）諸国全体の派兵数をはるかに凌いだ。

ソウルに滞在した1週間、夜は「ホテル国際」7階の一室で、韓国出身の選手が活躍する日本プロ野球の試合をテレビ生中継で観戦、また時間をかけて『韓国現代史』を読み返した。

昼間は高層ビルが林立する明洞地区を歩いた。都心循環コース・バスに乗り、複雑な表情をみせる下町にも足をのぼした。朴正熙の時代から四半世紀をへた街は、当時と際立った変化を見せているはずだった。だが、市街地のごく一部をのぞくと、高層ビルの足もとに昔ながらの古びた家屋や町工場、電気製品や工作器具などをあつかう雑多な建築物が身を寄せあっている。ショッピング街のひとつ東大門界限は、ビルの隣にも新しいビルが建設中で活況を呈しているが、近辺には雑貨や衣類をあつかう露天商のテントが立ち並び、米軍や韓国軍の野戦服まで売っていた。そのような新旧社会が混在する光景に出会うたびに、私は新聞記者⁵⁾になりたての、昭和30年代後半（1960年代）の日本を思い出した。東京オリンピックが開催された1964年10月前後の有楽町や銀座界限のアンバランスな風景—ソウルにはそんな郷愁を呼び覚ます一面が、まだいたるところに残っていた。

＜ソウルの変貌＞には、こんな一節もある。

工業化は人びとを都市へとさそい、爆発的ともいえる都市化がこの間に進んだ。朴正熙時代の不均衡発展のもうひとつの帰結は、産業や人口の異常なまでの都市集中である。（中略）。60年前後のソウルは、人口245万（全人口の約1割）ほどでいまだ中間層は薄く、一握りの飛びぬけた金持ちと圧倒的多数の貧民がこの街を形づくっていた。中心地のソウル市庁舎前にも貧相な露天商が軒を連ね、物乞いやチューインガム売り子の子供たちが群がっていた。東大門から東西にのびる清溪川（チョンゲチョン）は悪臭を放つどぶ川で、その両岸にはタルトネと呼ばれるスラムが果てしなく広がっていた。そこは、まさに、他のアジアの多くの都市がそうであったように、スラム、物乞い、物売り、売春、疾病がひしめく貧困地帯であった。

朴政権期の63年には、大幅な市地域の拡張が実現する。漢江の南と北部郊外が新たにソウル市に組み入れられ、この街は空間的にも二倍強に広がった。文京洙の記述によると、かつて桑

畑だった漢江の南は、ソウルの発展を象徴するシンボルとなった。重化学工業化の進展した70年代には、工業団地はもとより、高度成長の波に乗った中産層の住宅団地がここに建設された。漢江に浮かぶ、かつては船着場に過ぎなかった汝矣島（ヨイド）は行政・金融の中心地に変貌した。

ソウル滞在の一日、私は88年9月に開催されたソウル五輪のメイン・スタジアムもある漢江・南部の新開地に行った。富裕層が住む高級住宅地から見ると、スタジアムは北方の一角に建設されていた。近くに船着場あった。遊覧船に乗ってみた。1時間ほど漢江をさかのぼると、汝矣島のシンボルとなった地下3階、地上60階の「大韓生命63ビル」が塔のようにそそり立っている。ビルの壁面が夕日に金色に映えて見えた。船上の若い男女20人ほどのグループが、歓声をあげ、「63ビル」を背景に記念写真を撮りはじめた。「63ビル」は2006年にリニューアルしてオープンしたという。レストラン街やショッピングセンターがあり、映画館、水族館まで入っていた。汝矣島の船着場周辺には、漢江の河原を利用した広大な市民公園があり、休日を憩う家族にとって「63ビル」は、楽しみの場のひとつになっていた。

<ソウルの変貌>を読み返しているうちに、今回の旅が、文京洙の祖国の歴史再構築への熱い思いに惹かれてはじまった、だけではすまされない、別の意味をもっていたことに思いあたる。旅に出る前、なに気なく読みすごし忘れ去っていた記述に、07年12月19日の大統領選挙にかかわる見逃せない表現があったことに気づいたのである。

ソウルの人口は、その間、年平均増加率が4.1%と驚異的なテンポで拡大した。74年には地下鉄（ソウル駅から清涼里・チョンニャンリを結ぶ1号線、ソウルを循環する2号線は78年に着工されている）が走り始め、清溪地区にはもはや川はなく、暗渠となってその上に一般と高速の二層の道路が走った（2005年9月、川は復元されて市民の憩いの場となっている）。

（下線は筆者・大空）

ソウルへの旅に出る数日前、自宅で購読している朝日と読売新聞に「韓国大統領選挙 ハンナラ党候補に李氏」という報道があり、私は虚をつかれる思いでその記事を読んだ。「虚をつかれる」と書いたのは、12月に大統領選挙があるというスケジュールが、それまで私の記憶のメモにはなかったからである。以下に朝日新聞が伝えた李明博候補選出ニュースも紹介しておきたい。

【ソウル＝竹腰雅彦】韓国の最大野党ハンナラ党は20日、大統領選の公認候補に李明博（イ・ミョンバク）前ソウル市長（65）を選出し、韓国は12月19日の選挙本番に向け、本格的に動き出した。同党は約50%の支持率を誇るため、李氏は最有力候補となり、10年ぶりの保守政権をめざす。だが、10月初めの南北首脳会談⁶⁾や、自身の不正疑惑など、今後の展開

には不利な要素もあり、現在の勢いを最後まで維持できるかどうかが焦点となる。(以下略)。

(07年8月21日付 朝刊)

その日の朝日新聞社説には次の一節があった。「党内の公認争いは、朴正熙大統領の長女である朴槿恵氏(パク・クネ 55歳)との事実上の一騎打ちだった。朴氏はく初の女性大統領を>という旋風も巻き起こしたが、わずかな差で競り負けた」。

仁川国際空港の開港といい、韓国の大統領選挙の日程といい、それを知らずにいたわが身のうかつさ。新聞記者を辞めて10年たち、いまは大学に籍をおいている身とはいえ、それでも生涯一記者を自称し、「ジャーナリストであり続けたい」と願う身でありながら、この体(てい)たらく。そんな自嘲はさておいて、本題に戻る。保守系野党のハンナラ党からの李明博氏の出馬が注目されるのは、10年ぶりの保守政権「復活」の可能性が出てきたという、その一点にあるのだろう。私個人の関心をここであえてつけ加えるとすれば、李氏に敗れた朴槿恵氏がハンナラ党の元代表であり、彼女が79年に部下のKCIA部長に射殺された朴正熙大統領の長女であるという事実、そして彼女が李明博氏に敗れたことに特別の意味があるように思われた。

そのような生ニュースとは別の次元の、見のがせない話まで出てきた。ソウルを出発する前に読んだ朝日新聞の別の記事の中に、その一節があった。そして、またそこでもうかつに、その一節を読み過ごしたまま私は旅立っていた。ホテルのベッドで文京洙の<ソウルの変貌>を読み返すうちに、(注)の形で挿入された「2005年5月、川は復元されて市民の憩いの場となっている」という表現を発見した。そのとき私は読み過ごした箇所があったことに気づいたのだ。私はソウルの旅に持ち込んでいた新聞の切り抜き帳を取り出し、「ニュースの顔」欄に(8月21日付朝刊)その文言を探った。

<韓国ハンナラ党の大統領候補に選ばれた 李明博氏(65)>

成功神話と実行力。低迷する経済の再生に期待をかける支持者の期待を背に、政権奪還に挑む。

植民地統治下、日本に移り住んだ両親のもと、7人きょうだいの5番目として大阪で生まれた。日本の敗戦で帰国した後、果物などを売り歩き、酒かすで空腹をしのいだ。高校夜間部に通い、名門・高麗大に入学、日韓基本条約締結に反対するデモに加わり、半年間服役した。

だが、65年に現代建設に入社し、進路は大きく変わる。現代財閥の総帥、故鄭周永(チョン・ジュヨン)名誉会長の目にとまり、77年に35歳の若さで社長に就任した。経済成長の波に乗って次々と事業を受注、「ブルドーザー」の異名をとり、成功神話を築き上げた。

92年に国会議員当選。「CEO（最高経営責任者）型政治家」といわれる手腕をもっとも発揮したのは、02年にソウル市長当選後に取り組んだ河川復元事業だ。幹線道路をほりおこして地下水路を清流に戻した。

世論調査では昨秋以来、常にトップ。公認選では不正疑惑の追及をかわして辛勝した。

(ソウル・高槻忠尚) (下線は筆者・大空)

翌朝、夜が明けきらない清溪川べりを歩く。ホテルから5分とかからない場所に清流があった。珍しく小雨が降った。風が冷たい。午前7時半に、「南北分断」の現場、非武装地帯見学バスがホテルに迎えにきてくれるはずだ。その前に清溪川復元の現場を見たいと思った。かつての暗渠は取り壊され、上を走っていたという高架自動車道もとり壊され、朴正熙時代に出現した風景は消えていた。ソウル滞在3日目の9月1日。清溪川と李明博大統領候補が、私のなかで重なり、はじめて実像を結んだ。

3. 断章 「暗い絵」の遠い記憶

新聞記者として直接取材したことはない韓国が、私の記憶に鮮明に浮かび上がるときがある。いまから25年も前の話もそのひとつだ。1972年8月、サイゴン特派員の任務を終え帰国したころ、会う人ごとに問われた。「サイゴン⁷⁾は大変だったろう。危なくなかったかね」―「そうでもなかった」といえば嘘になる。だが、「そうでもない」面もあった。

事件のない朝、読売サイゴン支局があるグエン・フエ通り⁸⁾に近いレストランでの朝のひととき。天井にぶらさがる旧式扇風機のプロペラがゆったりとまわり、あけ放はなれた窓から、まだ熱気をとまなわない風がはいつてくる。粗末なアルミニウム製のドリップ式ポットからゆっくり抽出されるコーヒーの香りを楽しみながら、焼きたてのパンを口にいれる。旧宗主国フランスが残した棒状のパン、バゲットは本場に劣らずうまかった。

読売の支局を出てグエン・フエ通りを南に下ると、サイゴン川に突きあたる。川の近くに、当時、日本大使館があった。大使館に立ち寄った帰りに隣の韓国料理店にもよく通った。

ある日の午後、「このキムチはうまいなあ」と親しかったTBSテレビのサイゴン特派員、黒田宏（すでに故人となっている）と話していると、「そんなにうまいですか。わが家に来なさい。もっとおいしいキムチをご馳走しますよ」と背後から声がかかった。韓国の人である。戦場への発進準備体勢にはいった軍戦闘機が垣間見える、タンソニェット空港に隣接した仏植民地時代のゴルフ場で、声をかけあったことは一度もないが、姿をよく見かける韓国商社の現地社長だった。

数日後、社長宅に黒田とうかがうと、待機していた幹部社員らがいっせいに起立して出迎え

た。全員が背広姿の正装である。やがて大テーブルを囲んでの夕食となった。

「これは、きのう漬けたばかりのものです」。

日本語でそう言って奥さんがまず運んでくれたのは、うすい輪切りのリンゴが浮いた水キムチである。ほかにも何種類ものキムチがでた。カルビが焼ける香ばしいにおいと家族団欒のなごやかな雰囲気、惜しげなく振舞われる韓国の酒に酔い、しばし言葉もなくキムチと焼肉をほおぼった。

* * *

戦争が最も激しかった68年8月には、旧読売支局があったビルの一角に解放戦線側が撃ち込んだロケット砲弾の破片が直撃、4階のアパートに宿泊していた日本経済新聞の酒井辰夫特派員（当時32歳）が破片を頭に受け死亡している。私が赴任した70年5月の状況は、サイゴン市内に限ればそのときほど厳しくなかった。しかしニクソン米大統領が発動した「カンボジア進行作戦」⁹⁾により、戦火はインドシナ半島のほかの地域、カンボジアとラオスにまで広がりはじめていた、

その年の12月7日、中部ベトナムのクイニョンで、下校途中の中学生が軍用トラックからまったく意味もなく発砲された米兵の銃弾で撃ち殺された。現地に行くと「殺人者アメリカ人」「米兵の野蛮な行為を許すな」という怒りの字句が民家の壁、ベンチ、看板の上に赤ペンキで書きなぐられている。少年の家の仏壇には、町の写真家が撮影した現場写真が置かれていた。からだを二つに折り、校門わきの柵にぶら下がり死んでいた少年—地面に教科書とノートが散乱し、背後には、惨劇に呆然と立ちすくむ子供たちの大きな目が光っていた。二日後、怒りはサイゴンにまで広がる。大規模な学生の抗議デモがあり、米兵たちが襲撃された。このとき韓国軍兵士も襲われた。ベトナムでの韓国軍兵士は勇猛さで知られていたが、サイゴンっ子には米兵におとらず嫌われていた。

沖縄の米軍基地の町コザで住民が米軍車73台に火を放ったのが12月20日だ。沖縄はベトナム戦争へ飛び立つ米軍機の発進拠点であった。「コザ焼き討ち事件」として知られる騒乱の様子は、米軍向けの英語放送を通じてサイゴンでも逐一把握できた。

赴任から半年に満たないサイゴンで、この種の記事を何本も書いた。クイニョン事件が起きる一か月前には、「虐殺の村ソンミ」¹⁰⁾にも行っている。68年3月16日に起きた事件は1年半も闇の中にあっただが、ライフ誌が入手した虐殺現場の写真が世界に衝撃を与えた。虐殺の当事者カーレイ中尉が、自己に有利な証言収集のためソンミ村に近い米軍基地にやってきたとき、フリー・カメラマン守田宏一郎と現地に行った。以後も二回、ソンミ村ルポを手がけている。ベトナムの任地を去って18年後、連載シリーズ「世界の遺跡」のために、ベトナムの中部海岸一帯に残るチャム族の祠塔遺跡をカメラマンと取材してまわったときも、途中、ソンミ村に立ち寄り写真グラフに挿入した記事「よみがえった“虐殺の村ソンミ”（90年10月26日付）」を書いた。

サイゴン特派員時代を終えて72年8月15日に帰国していた私は、パリで68年5月以来続いていたベトナム和平会談の進展により「停戦が近い」という状況のもと、12月に応援要員として再びサイゴンの土を踏んでいる。手元に残るパスポートには12月6日の南ベトナム入国印が押してある。後の韓国大統領・金大中氏の拉致事件¹¹⁾は、2度目のベトナム取材を終えて帰国した直後の、73年の8月8日、東京で起きた。都心のホテルから、白昼、5人組の男に麻酔薬をかがされ連れ去られた奇怪な事件だった。

個人の体験に即して言えば、韓国を揺るがす大事件は、奇妙なことに私が日本にいるときに起きている。事件とはなんの脈絡もないはずだが、「2007年夏 ソウル」の原稿を書き始めて、このことに気づいた。パリ特派員(74年9月～78年5月)から帰国、東京本社・国際部のデスクになった翌年の79年10月26日に起きた朴正熙射殺事件。そして80年5月の、民主化を求める民衆と学生の「反乱」が武力で圧殺された「光州事件」である。このときは、中国共産党機関紙「人民日報」の招きで実現した読売新聞訪中団(団長・渡邊恒雄論説委員長・当時)の一員として、2週間余の旅を終え帰国したばかりであった。

4. 「光州事件」の武力鎮圧と重なった華国鋒首相の訪日

朴正熙大統領が凶弾に倒れる1年前、中国では「鄧小平の時代」がはじまっていた。それまで失脚の身だった鄧氏は、78年12月の第11期中総会で主導権を握り復活、華国鋒首相が推進してきた毛沢東＝文革路線上の近代化政策に代わり、「文化大革命」を断ち切ったうえでの「四つの近代化」¹²⁾路線を打ち出した。それが軌道に乗りはじめた時期と読売訪中団の北京入りは重なる。中国の新しい状況を日本国民に伝えて欲しいという意図が、人民日報の招きの背景にあった。華国鋒首相¹³⁾の5月訪日が日程にのぼっていた。

文京洙がいう“周縁の人々”の反乱が、政府軍によって武力鎮圧された80年5月27日、華国鋒首相は笑顔で東京・羽田空港に降り立った。読売新聞は、8ページにわたる「華国鋒首相来日特集」(5月27日付朝刊)を組んだ。そのフロント・ページには、「新世紀ひらく中国」のタイトルのもと、後の編集局長・北原健児記者が文を添えた。その一節が記憶に残る。

(前略) もちろん中国の元首級が日本の土を踏むのははじめてである。明治以来、アジアの中でただ一つ、近代国家をつくり上げた日本と、21世紀をめざして四つの近代化を進める中国の結びつきがもつ意味は大きい。過去の不幸な歴史を乗り越え、47年(1972年)9月、両国が正常化してからの日中間の交流のテンポには、目を見張るものがある。

貿易、航空、海運、漁業、商標の五つの実務協定が結ばれ、53年(1978年)には正常化してから懸案だった日中平和友好条約も締結、同年10月に鄧小平副首相が訪日した。この間、

貿易額は往復で6倍、人的往来は7倍に伸び、久しく「近くて遠い隣国」と中国が呼ばれたことも昔日の感がある。

北原記者の記事のうえには、小学校低学年の女の子と男の子たちの笑顔が紙面からはみ出すほどに特大で掲載されていた。訪中団の一員だった写真担当の廣瀬昌三記者が撮影したものだ。私たちは、3月24日に成田空港を飛び立っていた。まず北京に滞在した後、西安、広州、上海など広範な地域をまわり、その間、政治・経済人、作家とのインタビュー、「文革」時代に禁じられていたキリスト教の教会での中国人信者の礼拝、ビール製造工場、製鉄所の建設現場などを取材。故宮や万里の長城も訪れた。すべて「人民日報」のはからいによるものだった。その成果を華国鋒首相の訪日前に、「80年春 中国」¹⁴⁾の総タイトルのもと10本の連載記事の掲載を終えていた。

上海に滞在中の半日、「特例」により自由行動を許された私は、かつて家族が住んだレンガづくりの家屋を訪ねた。建物は昔のままだが、中国人の4世帯が同居していた。小学校は中学校に変わっていた。近代化の歩みがはじまったばかりである。昔がそのまま残る一面を垣間見た。

「華国鋒首相 来日特集」の5～6ページは写真特集で、廣瀬記者撮影の写真10枚が、「おおらかな魅力の中で」「ダイナミズム“舞う”中国」のタイトルをはさんで両ページに振り分けられている。“舞う”というひねった表現は、上海で撮影されたダンサーたちの、「大胆な舞台衣装、振り付けにも西洋スタイルを取り入れて」という写真説明から採用されていた。ほかに日中戦争発端の盧溝橋を人民服と帽子姿でジョギングしている青年、上海石油コンビナートで働く従業員のための高層団地、“過激な裸体の露出”で話題となった大壁画「生命の賛歌」の写真もある。それらの写真にそえる短文を私が書いていた。

人間的なこと—それが中国文化の特質だという。先人は円熟した「老人の文化」と書いた。寛容でユーモアに富み、平和で満ち足りている。深い知恵に、時として老年の弱さをともなう。その場合でも弱さを愛する文化なのだ。中国の人そのものにも、同じことが言えるのではあるまいか。私たち読売新聞訪中団は二週間余りこの国を旅したが、こうした中国の本質、長い歴史を通じ不変なものを把握（はあく）するには短期間にすぎ、近代化路線を歩む新生中国のダイナミックな「変化」の方にとすれば目を奪われがちであった。

たとえば、北京の新国際空港ターミナルビル。大小十数のホールや通路を飾る巨大な壁画群と漆絵、ガラス絵、貝彫画を見た時の新鮮な驚き—とくに外国人観光客用のレストランの壁面に描かれた<生命の賛歌>は、圧巻だった。タイ族の「水かけ祭り」を画材に、若い男女の輝くばかりの裸体を大胆な筆致で描き、直截（ちよくせつ）な表現が論議のタネにもな

っていた。

私たちが日本に帰った直後、沐浴する娘の裸体の一部がカーテンで覆い隠されたというニュースが伝えられた。近代化へ試行錯誤する中国の一断面を見る思いがする。が、この国が確実に前進し、脱皮を続けている実感だけは変わらない。(後略)。

なんという皮肉だろう。華国鋒首相の訪日を祝う紙面の片隅に、武力で鎮圧された光州の人びとの怒りと悲しみが同時に掲載されていた。翌28日の朝刊一面トップには、「第1回日中首脳会談で一致」「韓国情勢を憂慮」「緊密に情報交換」「華首相 『北』の南進はない」という大見出しと、当時の大平首相と華首相が硬い握手を交わしている写真が大抜いで掲載されている。そのわきには、ワシントン特派員による「米も“韓国軍政”懸念」「国民反発で混乱激化も」という記事が添えられていた。韓国は以後も軍制下の困難な道を歩み、野党の蔭にあって民主化を叫び続けた金大中氏が大統領の座につく97年12月の選挙まで、光州事件から実に17年の歳月を要した。

5月18日から緊急事態に突入した光州事件に関する文京洙の記述によると、事件のさなか「抵抗の都市・光州」には、一時、官権と軍隊の手がおよばない「解放区」が出現、市民による自治もはじまっていた。事件終息の5月27日に投入された政府側の兵力は6172人、市の郊外での作戦行動まで含めると2万人を超えた。2001年までに韓国政府が確認した光州事件での犠牲者(死者)の数は、民間人168人、軍人23人、警察4人、負傷者は4782人、行方不明者は406人に達する。

光州事件が武力で鎮圧された80年は、世界が大きく変わろうとしている時代だった。ポーランドの港湾都市グダニスクで8月14日にはじまったレーニン造船所のストは、たちまち「社会変革」運動に変質、自主管理労組「連帯」を誕生させた。8月31日には21項目の「政労合意」が成立した。この労働者の戦いは、89年11月の「ベルリンの壁」崩壊—ソ連・東欧の社会主義圏瓦解の引き金となる。「鄧小平の時代」の中国は広東省などの「経済特区」を中心に目覚ましい経済成長期に入った。今日の経済大国中国を実現させる出発点となった80年である。

一方、民主化を希求する人びとが、光州事件以後、民主化の原点となった87年の「6月抗争」成果獲得まで、7年余の暗いトンネルをくぐらねばならなかったのが韓国であった。

5. 「南」「北」分断—傷ついた“解放”の後に

ソウルの「国際ホテル」7階の一室で『韓国現代史』を読み返していると、歴史の“周縁”に追いやられた人びとの苦しみ、抵抗運動を圧殺する権力への深い怒りが胸を打つ。文京洙は

それらを「地域葛藤」と「抗争（ハンジェン）」という言葉に収斂させ、語りの主軸にすえていた。序章「朝鮮史における中心と周縁」と第一章「傷ついた“解放（ヘバン）”」に、この国が歩んだ特異な道のりの本筋がある。

文京洙は韓国特有の歴史用語「抗争」について、序章の冒頭で説明している。

韓国で人びとの圧制に対する抵抗は抗争（ハンジェン）と呼びならわされている。日本では<暴力団の抗争>などという言い方があって、「抗争」という言葉にはアウトロー同士の勢力争いや暗闘といったイメージがつきまとう。しかし、韓国で「抗争」といえば圧政への道義的な反発や異議申し立てといった意味が込められている。87年6月の出来事¹⁵⁾も「6月民主抗争」、もしくは「6月抗争」と呼ばれて、現代韓国の民主主義の原点の一つとして歴史に刻まれている。

* * *

1945年8月15日、日本の敗戦によって朝鮮半島には、つかの間の「解放空間」が出現した。文京洙によると、「解放」は独立運動の指導者によって準備されたものでなく、日本支配のあつけない幕切れ、「唐突でさえあつた」その間隙をぬうように「植民地の頸木（くびき）から解き放たれた人びとが自発的な権力組織づくりに大挙して歩みだした」のだ。彼は、このような「自発的な権力組織づくり」について、アメリカの哲学・政治学者ハンナ・アーレント（ドイツのハノーヴァー生まれ、1940年、ナチス政権から逃れてアメリカに亡命。51年に米市民権を得ている。）の言葉、「準備されない革命」を引用し、やがて米ソ両大国の介入でつぶされていく「自発的な権力組織」の誕生に特別の意味を見出している。

第1章「傷ついた解放」の一連の記述は、80年8月、ポーランドに誕生した自主管理労組「連帯」の記憶を呼び覚まし、私のなかで不整合な形ではあるが幾重にも重なりあつて胸に迫ってくる。このとき私は5月の「光州事件」をも重ねて見ていた。

レーニン造船所の一介の電気工に過ぎなかったレフ・ワレサ（当時37歳）。彼がポーランドの「革命」に火をつけた。

「われわれは証明した。その気にさえなりさえすれば、ポーランド国民は互いに理解し合えることを。諸君、われわれはストの期間中でさえ、祖国の利益をわすれることはなかった。その気持ちを抱いてあす、9月1日から仕事を再開しようではないか。

われわれは要求をすべて勝ち取っただろうか。そうではない。だが、多くのことを、この状況下で望みうる最大の成果を獲得した。残されたものも、今後、みんなの力で獲得して行けるだろう。いまや、われわれには、われわれ自身の組合があるからだ」

食肉価格の30~60%引き揚げに抗議して、80年8月14日にはじまったレーニン造船所労働者のストは、ポーランド各地に波及した。そして8月31日、労働者の21項目の要求を呑んだ「政労合意」が成立した。「連帯」委員長としてのワレサの声が、「政労合意」直後の彼の演説に実際に現場で立ちあつたわけでもないのに、私の耳もとに響いてくる。

翌81年12月13日、この国にヤルゼルスキ將軍を議長とする救国軍事評議会が成立、戒厳令が敷かれ、「連帯」の活動は地下に追い込まれる。戒厳令は83年7月に解除されたものの、その後も自由を求めるポーランドの模索時代は、將軍に代わりワレサ「連帯」委員長を国家元首の座に押し上げた自由選挙による90年11月の大統領選挙まで続いた。ヤルゼルスキ將軍は、89年7月くらい就任していた大統領の座を去るにあたり、「過去9年間に国民がこうむった苦痛に対して心からすまないと思う」と謝罪した。ワレサ大統領の誕生直後の90年12月のことである。將軍は、81年に直面した「国民の悲劇」つまり内戦の危機と、ソ連が56年のハンガリーと68年のチェコで見せた軍事介入¹⁶⁾の悪夢を回避するための戒厳令だったと弁明しながら、当時、国民を「和解」に導けなかった自らの責任を釈明したのだ。

私は80年夏の、ポーランドの激動を一冊の本にまとめ出版していた。その年9月のある日、読売新聞東京本社の国際部デスクをしていた私に、電話があった。「仏ルモンド紙の記事を翻訳しませんか」。電話の主は、当時、出版社・新評論の編集者であった藤原良雄氏（現在、藤原書店社長）である。ルモンドは東京の読売新聞社にも郵送されていた。そこにはワルシャワ特派員ベルナル・ゲッタ署名入りの、克明な現地ルポが連日のように掲載されていた。私はそれらの記事をコピーし、パリ特派員時代をともに過ごした川島太郎と手分けして翻訳した。日本の新聞各社もワルシャワからの「特電」をあつかってはいたが、当時、現地に常駐記者はおらず、ロンドン、パリから現地入りを試みる記者たちへの入国ビザはすぐには発給されないため、多くは滞在期間わずか72時間の観光旅行者用トランジット・ビザで入国しなければならなかった。そうした苦しい状況下で書かれた日本人記者の「特電」には限界があった。私たちは、「より詳しいポーランドの状況を読者に知ってもらいたい」一心で翻訳を急いだ。

<現地ルポ>『ポーランドの夏 激動の20日間』は、翌81年1月1日に初版が出版された。その年の5月、総評の招きで「連帯」ワレサ委員長の来日が実現。これを機会に委員長に密着取材した同僚、中園龍二の原稿「ワレサ訪日を記念して—その隠された国際戦略」を新たに加え、6月に増補新版として出版、版を重ねた。

文京洙が光を当てた「解放空間」の出現は、ポーランドの「連帯」誕生とは、歴史的背景と影響の広がり、そこに関わった人びとの活動の実態において、同じ次元での比較はできないだ

ろう。しかし、56年の「ハンガリー動乱」時に出現した「評議会」をひとつの例にあげてアンナ・アーレントが用いた別の表現—政治社会の激変期に地域や職場に生まれた人びとの自発的な権力組織を、「革命から生まれた唯一の新しい統治形態」—としてそこに深い意義を認める文京洙の「歴史」への先鋭かつ明敏な眼差しに、自主管理労組「連帯」に寄せた労働者たちの切実な思いに相通じるものを感じとったとしてもおかしくはない。1945年8月の朝鮮半島には「実際、解放を主導的に迎えた独立運動の指導者はほとんどいなかった」のであり、前述したように「植民地の頽木から解き放たれた人びとが自発的な権力組織作りに大挙して歩みだした」事実の重みがそこにあるからである。

中国東北部で抗日遊撃戦を繰り返した金日成（キム・イルソン）は40年頃には関東軍の猛烈な討伐にあいハバロフスクに逃れていた。ソ連軍の庇護のもとに彼が元山にたどりついたのは、「解放」の日から一か月以上たった9月19日のことである。一方、アメリカにいた李承晩は臨時政府¹⁷⁾の承認を求めて米国務省など関係筋への日参に明け暮れていた。彼が31年もの亡命生活を終えて帰国したのは解放から二か月もたった10月16日だった。文京洙は、臨時政府主席として「大韓民国」の名で日本に宣戦布告した民族主義の巨頭・金九（キム・グ）の発言も紹介し、日本の敗北が「わたしにとって喜ばしいニュースというよりは、天が崩れるような感じだった…心配だったのは、われわれがこの戦争でなんの役割も果たしていないために、将来の国際関係において発言権が弱くなるだろうということだ」という彼の危惧をも「傷ついた解放」の中に書き込んだ。

このように混沌とした朝鮮半島に、米ソ両大国が「信託統治」の形で介入した。しかし実態は「占領」であった。文京洙はこの間のいきさつを「広島・長崎への原爆投下とソ連の参戦（8月8日深夜）を受けて日本が降伏（ポツダム宣言の受諾）を決めたのは8月9日の深夜だった。38度線を挟んでの米ソによる分割占領は、翌日アメリカ側の提案をソ連が呑んだことで決まったものである」と書いている。米ソの占領によって引き起こされた人びとの不満や抵抗についても、筆者は多くのページを割き詳細に書き込んでいる。が、それをすべて列挙するのは、私の「書評エッセー」の意図にはない。ここでは、米ソ占領の実態に触れるものを、文京洙の記述から二、三とり上げるだけにとどめておきたいと思う。

* 平城に進駐したソ連軍が実質的な中央政府-民生部（Soviet Civil Administration）を成立させたのは10月であった。軍の関心は、北朝鮮地域での親ソ政権の樹立にあり、そのためには、ありとあらゆる非左派分子を排除した。大戦後、ポーランド、チェコ、ハンガリーなどの東欧諸国がソ連圏に組み込まれていく政治過程を、私に想い起こさせた。

* 「北」の人民委員会のもとでの社会改革は、「北」から「南」への「矛盾の流出」ともいえるべき事態をともなった。おびただしい人口流出—いわゆる「越南民」の増大である。その数

は80万人¹⁸⁾にのぼるとされた。その多くは徹底した反共主義者として警察や右翼による左翼攻撃の先頭に立ち「南」での左右勢力の力関係を変える要因となった。1948年4月に起きた「済州島事件」¹⁹⁾にも彼らは投入され、島民を弾圧する側に回った。

* 「南」では「マッカーサー布告」がだされ、占領者としてその政策への服従を住民に命じた。米軍の戦術部隊は、広域行政単位の道レベルでは人民委員会を解体し軍政を立ち上げた。

終戦直後に朝鮮半島に生じた「解放空間」はこうして消えた。50年の朝鮮戦争を経て韓国では「反共」が人びとの行動様式を決めるようになる。米ソ間の冷戦は一段と激化、終戦直後に日本の武力解体をはかったアメリカが、「再軍備」を求める政策に転じたのもこのときであった。

6. 既成のイデオロギーを超える 新しい時代の幕開け

2007年12月19日—韓国大統領選挙の行方を伝えるNHKは、夕方6時のニュースで開票がはじまってまだ数分とたっていないのに、保守ハンナラ党・李明博候補の大勝を報じた。選挙事務所にはVサインを出して歓喜する李夫妻をとりかこむ若者たちの笑顔、笑顔があった。それは「10年ぶりの保守派大統領の復活」を単純に祝う笑顔とは違っていった。5年前の大統領選挙で盧武鉉氏を権力の頂点に押し上げたネット社会²⁰⁾—そこで彼が抛りどころとしたネティズン(インターネットと市民の合成語)と呼ばれるインターネット世代の若い有権者の多くが、今回は、李明博候補支持に回っていた。

歓喜にわきかえる李明博選挙事務所の光景を、夕食前、自宅のテレビで見つめる私の内部で、「過去」の興奮が、突然、フラッシュバックする。海外特派員時代に取材したさまざまな選挙の記憶が、人々の複雑な表情と重なりあってよみがえる。パリ和平交渉の行方が見えず戦火が続いていたさなかの、71年10月の南ベトナム大統領選挙。あのときは北ベトナムへの強気な姿勢を崩さなかったグエン・バン・チュー大統領²¹⁾が再選された。ベルリングエル書記長のもと共産党が政権の座にもう一步のところまで迫った76年6月のイタリア総選挙。独裁者フランコ統領の死後(75年11月)、王位についたカルロス王子のもと民主化の道を模索しはじめたスペインの総選挙・・・中でも、88年のフランス大統領選挙は、再生ビデオの画像さながらに鮮明に思い出される。

1988年5月8日午後8時5分、フランソワ・ミッテラン大統領の再選を許したジャック・シラク候補(当時首相)の顔がテレビのブラウン管にクローズアップで映しだされた。開票

がはじまって数分しかたっていない。ロンドンから取材の応援で駆けつけた私は、読売・パリ支局で大統領選挙の原稿を書いていた。

「フランス国民は国家への責務をミッテラン氏にゆだねた。民主主義においては、国民こそが主人であり、私はその選択に従う」

フランス大革命200周年を翌年にひかえた88年の大統領選挙は、こうしてあっけなく幕を閉じた。だが、ミッテラン再選の興奮をテレビは一挙に盛り上げていった。つとめて平静を装うシラク首相の顔が引きつっている。一方、パリの社会党本部ではシャンパンの栓が景気良く抜かれる。フランス中部ニヴェール県のシャトーシノン市庁舎にあらわれたミッテラン氏は「ミッテラン、プレジダン（大統領）。ミッテラン、プレジダン」と叫ぶ支持者の圧倒的な声量の前に立ち往生。しばらく勝利宣言を読み上げることもできない。

「81年の大統領選挙では、勝利を祝う支持者がバスチユ広場²²⁾にあつまった。今回は祝賀会場にレピュブリック広場があてられ、すでに多くの若者が集まっています」。

テレビのアナウンサーの声が上ずっている。テレビの画面には、街路樹によじのぼって勝利に酔いしれている若者たちの姿が映し出された。一本の原稿を書き上げた私も、レピュブリック広場へ急いだ。広場に通じるグラン・ブルバールは警笛で勝利をたたえて走る車と人波でごった返している。車道も歩道も区別できなかった。子供づれの中年夫婦がいる。ジューパンの若者が特設のステージ周辺でおどり狂っている。ステージに据えられたテレビの大スクリーンで、録画されたミッテラン新大統領の勝利宣言の瞬間が何度も繰り返し流された。

「ミッテラン勝つ」。号外が舞う。広場の一角には屋台ができ、ソーセージを焼く煙があたりに立ち込める。時折、花火が夜空に上がる。バスチユ広場に通じるタンブル大通りも人波で身動きできないほどにあふれている・・・

再選されたとはいえ、舵取りは決して順調ではなかった。7年前の選挙でフランス第5共和制下²³⁾、はじめての左翼政権を誕生させたミッテラン大統領であったが、その政治理念にもとづく大企業と銀行の国有化政策は失敗。86年3月の総選挙で保守派が勝利し、大統領は左翼・首相は保守という「コアビタシオンCohabitation」（保革共存）というそれまで前例がない政治形態が出現したのもミッテラン時代だった。

「李明博候補の当選は、時代の変化というやつさ。韓国民の成熟でもあるだろう」。東京に残した友人の一人が電話口で言った。「だって、そうだろう。フランスでもミッテラン、シラクのあとにハンガリー移民の子、ニコラ・サルコジ²⁴⁾が大統領になったのだから」。

07年夏のソウルの旅では、林立する高層ビルと周辺にたち並ぶ昔ながらの町工場、商店が並

存するちぐはぐな街の印象は強烈だったが、盧武鉉時代に拡大した貧富の格差、大卒者の若者たちの就職難という、今日の韓国が抱える最大の問題は、私のような一旅行者の目には映らなかった。このときには、さし迫った大統領選挙への緊迫感も、街の風景にはみられなかった。

盧武鉉大統領の10月2日の北朝鮮訪問は、南北分断の傷を残す軍事境界線を徒歩で越えての平城入りという意外性で話題にはなったものの、ソウル発のニュースを新聞で読んで知るかぎりでは、韓国民はさめていた。金正日（キム・ジョンイル）総書記との会談あとに発表された「南北関係発展と平和繁栄のための宣言」は、その実現性が疑問視された。宣言には「朝鮮戦争の終結宣言²⁵⁾の推進」もうたわれていた。しかし、南北統一が両国の話しあいだけでは解決できない国際政治の厳しさを、韓国の人びとは肌身で感じていた。今回の大統領選挙で国民は、盧武鉉大統領の「理念の政治」より、国家のCEO（最高経営責任者）をめざす李明博候補の「経済優先の政治」に国家の舵取りをゆだねたのである。

* * *

ソウル滞在の一日をさいて非武装地帯（DMZ）へ向かった9月1日、大型観光バスには日本人グループはただ一組が乗っていただけで、あとは欧米の旅行者で満席だった。「現地雇用の韓国女性と結婚する社員を祝うために東京からやってきた」という日本商社の若い一行を除くと、他の旅行者は観光だけが目的の欧米人だった。「日本にも立ち寄ったのですか」という私の質問に、隣席の若いアメリカ人女性は「いいえ、ソウルのあとに済州島で一週間のんびり過ごして上海に向かいます」と答えた。若者のグループを率いた日本商社の中年社員の話も、私には意外だった。「最近では、韓国人の観光客やゴルフ・ツアーが九州や北海道にまで足をのばしていますよ」。この国の富裕層にとって、日本は「安上がり」のレジャー、観光、買物天国なのだという。

9月1日は土曜日で、DMZの中にある板門店までは行けなかった。私たち外国人観光客を乗せた大型バスはDMZの南側にある韓国側最北端の都羅山（トラサン）駅や、北朝鮮の山々や都市の一角が望める展望台、さらにはかつてソウル攻撃をもくろみ、至近距離まで北側によって掘られた軍用第3トンネルなどを見学したが、もはや“戦時”の緊張感はどこにもなかった。

都羅山駅の改札口の上には電光掲示板があった。韓国語、英語、日本語でこの駅の存在意義を伝えるメッセージが絶え間なく流されている。

都羅山駅—大陸に向かう出発点—2000年6月15日の南北共同宣言に続き、同年7月31日に南北両政府京義線鉄道の連結に合意した。そして、軍部隊が先頭に立ち鉄条網撤去や地雷除去などの難工事の末、2002年4月11日に都羅山駅が新設され、2003年6月14日に南北の軍事境界線において京義線の鉄道軌道は連結された。都羅山駅は韓国内外で南北統一を祈願し

世界平和を念願する場所として知られ、2002年2月20日に金大中大統領がアメリカのブッシュ大統領とともに訪問したのを皮切りに、韓国内外から毎年数十万名余の観光客がここを訪れている。

電光板表示板に4回に分けて流される「都羅山駅—大陸に向かう出発点」のメッセージを、私は携行していたデジタル・カメラにすべて収めた。「都羅山駅はソウル駅から56Km、北朝鮮の開城駅まで17Km、平城駅まで205Km」の位置にあり、「建物の屋根の形は太極模様を利用して南北が互い手をつないだ姿をしている」。さらに、次のようにも表示されていた。「現在、都羅山駅は、南側の最後の駅ではなく北側へ行く最初の駅として位置付けられている。いつか韓国鉄道（TKR）がシベリア鉄道（TSR）、中国鉄道（TCR）につながる日、都羅山駅は大陸に向かう出発点として再び意味付けられることだろう。近い将来、韓国が東北アジアの物流中心国として台頭する日を期待したい」。

第二次世界大戦後の冷戦時に出現した分断国家—ドイツ、ベトナム、朝鮮半島のうちで、今も南北に分断されている国家は北朝鮮と韓国だけになった。ドイツでは「ベルリンの壁」崩壊から1年後に、「東」が西ドイツに吸収される形で統一が実現した。ベトナムでは、最終的に「北」が「南」を武力で解放した形で統一された。韓国の場合、ドイツやベトナムとは違った形の統一があるだろう。それまでの道のりは、険しく長い歳月を必要とするかもしれない。しかし現実面において南北両国の歩みよりは、経済、スポーツ、人的交流を軸に着実に進んでいる。

2008年2月に就任した李明博新大統領への人々の期待は、経済再建だけにとどまらない。新しい時代を切り開くための、南北問題解決への最善の努力こそ、国民が願ってやまないものであるに違いない。

注

- 1) 当時、成立したばかりの大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で朝鮮半島の主権をめぐる勃発した紛争から発展した国際戦争。南北二国による分断が確定した。
- 2) 1950年6月27日の国連安全保障理事会は、この戦争を北朝鮮による韓国への「侵略戦争」とする決議案を採択。7月には米軍25万人を中心としてイギリス、オーストラリア軍などが加わった国連軍が結成されている。
- 3) 読売新聞のロンドン特派員として1985年10月から88年11月までイギリスに滞在、その間、北アイルランドの紛争取材でたびたび首都ベルファスト訪れている。72年1月30日には、後に「血の日曜日」とよばれる惨劇が起きた。北部ロンドンデリーの街頭に6000人のカトリック系住民が違法デモをかけ、

イギリス政府軍が発砲、死者13人をだしている。

- 4) 朴正熙は63年10月の選挙で大統領に当選。79年10月、KCI (韓国中央情報部) の夕食会の席上、部下の凶弾で死亡。このショッキングなニュースを、当時の読売新聞は夕刊の1面トップ (10月27日付) で次のように報じた。「朴大統領射殺される」「独裁18年 一夜で崩壊」「KCIA夕食会で金部長が撃つ」「屋外待機の警護室員も同時に」の大見出しのもと、以下、リード記事が続く。「韓国の朴正熙大統領 (61) が26日夜、射殺され、韓国政府は27日午前4時、済州島を除く全土に非常戒厳令を布告した。韓国政府の発表によると、朴大統領は26日午後6時ごろ、ソウル市内のKCIA分室食堂での夕食会に出席したが、その席上で、金載圭 (キム・ジェギュ) KCIA部長と車智澈 (チャ・チ Chol) ・大統領警護室長とが口論の末、ピストルの撃ち合いとなり、朴大統領は金部長が発射した弾にあたり、同7時50分に死亡した」 (以下略)
- 5) 私は1961年 (昭和36年) に読売新聞東京本社に入社、最初の2年8か月を地方部記者として秋田で過ごし、東京五輪前取材の控え要員として東京本社にもどっていた。
- 6) 韓国の盧武鉉大統領は10月2日、「南」「北」をへだてる軍事境界線を徒歩で越え北朝鮮の首都平城を陸路訪れ、金総書記との7年ぶりの首脳会談が実現した。このときの会談で両首脳は朝鮮戦争の周囲悦戦争の終結宣言推進など南北関係発展と平和反映のための宣言」に署名し、発表した。だが、残り5ヶ月の任期の盧政権がどこまで履行し、次期政権に引き継げるかが課題とされた。盧氏は次期大統領選挙には不出馬。あとを継ぐ与党候補が選挙戦で有利に戦えるよう配慮された、政治的意図が強い「北」訪問という見方が多分にあった。
- 7) ベトナム戦争は、1973年1月、パリで調印された「和平協定」で終結したはずだった。しかし、戦争はそれでは終わらなかった。75年4月、北ベトナム正規軍の戦車が「南」大統領官邸に突入、サイゴンは陥落した。
南北ベトナムが統一が実現した後、サイゴンは国民にしたわれた「ホーおじさん」の名にちなみ、ホチミン市に改称されている。
- 8) ホチミン市の目抜き通りのひとつ。今日、ベトナムでもっとも国民に人気がある18世紀の救国の英雄にちなんでいる。サイゴンの地名には歴史上の人物、英雄の名が残された通りが多い。
- 9) 米軍のベトナムからの撤退を公約したニクソン大統領は、70年4月30日、当時、中立国だったカンボジアへの越境作戦に踏み切った。ベトナム国境沿いカンボジア領内の「聖域」に北ベトナムが築いた、「解放戦線」支援のための武器・弾薬の補給基地をたたくことで、「すみやかな米軍の撤退実現」をはかるのが最大の目的とされた。この作戦と連動してカンボジアでは、3月18日、親米のロン・ノル將軍らがクーデタを起こし、ソ連に旅行中だった国王シアヌーク殿下を失脚させている。
- 10) タイニョンよりさらに北部の中部ベトナム・クアンガイ省の村。その地域は「解放戦線」の拠点のひとつと目され、米軍アメリカル師団による「索敵掃討作戦」の標的となった。米作戦地図に「ミライ4」と記された地域での殺戮がもっともひどく、今日、現地には平和を祈願する像が立ち、そばには全犠牲者504人の名前と年齢を刻んだ石版が残されている。
- 11) 金大中氏は当時47歳。韓国の民主化の運動の先頭になって戦っていた。事件前の72年10月、交通事故の治療のため東京に滞在中、朴政権による非常戒厳令の宣布で国会議員の資格をうしない、帰国を断念、その後、アメリカと日本を2往復、国外で反朴運動を展開していた。事件から5日後、ソウルに連行されていたことが判明。07年10月24日、盧武鉉政権下に設立された「過去事件の真相究明委員会」は、この事件が韓国の情報機関・中央情報部 (KCIA) 主導の「組織的犯行」とはじめて断定した報告書を公表している。

- 12) 工業、農業、国防、科学技術の4方面での近代化政策。
- 13) 77年の党大会で国政の主導権を握り毛沢東＝文革路線を継承しながら中国の近代化をはかったが、鄧小平氏を中心とする非文革派の台頭で、日本訪問後の8月、首相を解任された。
- 14) 4月に連載された「80年春 中国」に私は、次の2本の記事を書いていた。①「自由化の風」－犯罪も運んだ 闇物資もどっと（4月18日付）②「百花斉放」－風向き変わる“告発文学”下火に？（4月20日付）
- 15) 87年6月、韓国国内34の都市と4つの郡で100万人を超える学生・市民が、反独裁・民主化と大統領直接選挙制への改憲を求めて街頭に進出。その結果、79年の朴正熙大統領暗殺事件のあと頭角をあらわし、「光州事件」を血の弾圧で終息させ、政権の座についていた全斗煥大統領は、「6月民主化宣言」の発表を余儀なくされる。宣言には大統領直接選挙への改憲、拘束者の釈放、言論自由の保証、地方自治制の実施、大学の自律化、さらには反体制運動家の赦免・復権などが盛りこまれていた。その年12月の選挙で盧泰愚大統領が誕生した。（この注釈は、文京洙の記述をもとにした）
- 16) 1956年10月23日、首都ブダペストでの学生、労働者のデモをきっかけに「ハンガリー動乱」が勃発。翌24日首相に就任したナジ首相は次第に反共・反ソ連色を強め、11月にはワルシャワ条約機構からの脱退と中立を宣言。こうした動きに対しソ連は軍事介入。ソ連に連行されたナジ首相は反逆罪で処刑された。
チェコスロバキア（当時）では、68年、ドプチェク第一書記の就任後、新政策として党と国家の分離や表現の自由を打ち出した。「プラハの春」の到来を嫌ったソ連は、68年8月、戦車でこれを圧殺した。
- 17) 李承晩が関わった「臨時政府」について、文京洙は以下のような注釈を入れている。「正確には大韓民国臨時政府で臨政（イムジョン）と呼ばれていた。1919年の三・一運動後に上海で李承晩を首班として組織された。
25年には内部分裂で免職されていたが、太平洋勃発後、李承晩は臨時政府のアメリカによる承認が独立後の右派の主導権掌握に重要であると考えていた」。
- 18) 文京洙は80万人という数字の根拠を「国防部戦史編纂委員会編『韓国戦争史』第2巻に拠っている。1954年5月、対仏インドシナ戦争終結後のジュネーブ会議でベトナムが「北」と「南」に分断されたとき、共産主義を嫌って100万人を超えるカトリック教徒がサイゴンに逃れた歴史を私に思いださせる。
- 19) 光州事件とならび韓国の二大悲劇とされる「済州島事件」について、文京洙は著書『済州島現代史』の序文で「(済州島) 4・3事件とは、米軍政下にあった48年4月3日の武装蜂起に端を発し、その鎮圧の過程で3万人近い島民が犠牲になった現代史上の悲劇である」と概略している。
- 20) 文京洙は『韓国現代史』の終章・「過去へ、未来へ」のなかに<e-politics は未来を切り開くか>と題する一節を設け、近年、韓国社会が際立った変化を見せた背景に世界に先駆けるこの国のインターネット普及に関する論考を附記している。彼が依拠する資料「2004年韓国インターネット統計集」によると、2003年末のデータで、韓国の100人当たりの超高速インターネット加入者は世界1位（23.3人で2位が香港の18人、日本は7位で11.7人）、国別のインターネット利用率も世界2位（61人）である。彼はこの一節のなかでネティズンたちの政治意識や投票行動の移り気、気まぐれを指摘する一方で、インターネット時代の「直接民主主義の新しい可能性」をも書き込んでいる。
- 21) 75年4月30日、北ベトナム正規軍の進撃の前にサイゴンが陥落する直前に彼は大統領職を投げ捨てて

アメリカに逃れた。

- 22) 1789年のフランス大革命発祥の地。レピュブリック（共和制）広場はそこから北にのびるタンブル大通りの突きあたりにあり、フランスの共和制への移行を記念して作られた広場。
- 23) 第5共和制は、第二次世界大戦での救国の英雄ドゴール将軍が、58年、新憲法のもとに発足させた。大統領の権限は強化され、その任期は7年。ミッテラン後の保守派・シラク大統領（2002～07年）の時代に任期は5年に短縮された。
- 24) 保守中道の「国民運動連合」党首サルコジが、07年5月の選挙でシラク氏のあとを継ぎ大統領に当選、歴代大統領の“反米路線”を放棄、当選直後にアメリカを訪問、セシリア夫人との離婚でも話題になった。
- 25) 50年6月26日に勃発した朝鮮戦争は、53年7月27日、アメリカ、中国、北朝鮮の3者が休戦協定に調印したが、韓国はこれに反対して調印していない。したがって北朝鮮と韓国の間には形式上は戦争状態が今も続いていることになる。

(大空博，立命館大学国際関係学部 特別任用教授)